

氏名	坂田 寿子
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博文化甲第26号
学位授与年月日	平成30年3月23日
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当
学位論文題目	谷崎潤一郎作品における地歌・上方舞・京舞の影響
論文審査委員	委員長 教授 杉浦 晋 委員 教授 武井 和人 委員 教授 牧 陽一 委員 准教授 川野 靖子 委員 埼玉大学教育学部名誉教授 樋口 昭

論文の内容の要旨

序章では、言及、詞章の引用などが頻出するにもかかわらず、谷崎潤一郎の諸作を日本古典芸能、殊に地歌、上方舞、京舞に注目して考察することが、これまでほとんどなされてこなかったという事実を、まず確認した。そして、上方舞（山村流）の名取としての筆者の見聞と、小説『細雪』の内容との照応などに即しつつ、本論文の考察の意義、概要を述べた。

第一章は、東京に生まれ育った谷崎の、関西に移住する以前、すなわち地歌、上方舞、京舞に出会う以前の、日本古典芸能とのかかわりを述べた。第一節では、おもに初期の戯曲『象』をとりあげ、「狐」「母恋い」「白」「永遠女性の面影」（しばしば「姉妹対象恋愛」としてあらわれる）という、谷崎が終生追究した四つの主題の萌芽を指摘し、それに舞踊「保名」「狐會」が深くかかわっていたことを述べた。第二節では、すでに指摘されている歌舞伎「義経千本桜」のみならず、「蘆屋道満大内鑑」もそれにかかわっていたことを述べた。

第二章は、前章に引き続き、谷崎と愛好した歌舞音曲とのかかわりを述べた。第一節では、端唄、新内節など、おもに江戸下町の庶民が好んだ音曲への言及が、殊に初期の、もしくは自伝的諸作にみられることを検証した。第二節では、第一高等学校時代の体験に取材した諸作をとりあげ、そのいわゆる江戸趣味の内実を読み取った。第三節では、小説『幫間』『女人神聖』『少年の脅迫』をとりあげ、その芸事、殊に舞踊への洞察を読み取った。第四節では、随筆『朱雀日記』をとりあげ、谷崎がいわゆる古典主義に転じるきっかけとなった、上方芸能との出会いを跡づけた。

第三章では、地歌への言及、その詞章の引用などをふまえて、おもに小説の新たな解釈を試みた。第一節では、関西に移住した谷崎と地歌の出会いを跡づけた。第二節では、作品に言及、詞章の引用が存する地歌を総覧した。第三節では、地歌「綾衣」「由縁の

月」の詞章をふまえて、『蓼食ふ虫』を解釈した。第四節では、「黒髪」「雪」の詞章をふまえて、さらに解釈を重ねた。第五節では、「黒髪」と谷崎の三番目の妻松子とのかかわりを検証した。第六節では、「菊の露」と松子、及び二番目の妻丁未子とのかかわりを検証した。第七節では、言及、詞章の引用とも存在しない『卍』について、じつは「袖の露」の詞章が影響していた可能性を指摘した。第八節では、最初の妻千代から丁未子、松子に至る女性関係の変遷が「茶音頭」の詞章に投影されているという観点から、『春琴抄』と随筆『初音』を解釈した。第九節では、さらに『春琴抄』の佐助には、実際に「茶音頭」を学びなずんだ谷崎自身の経験が投影されていると解釈した。

第四章は、『細雪』と地歌、上方舞（山村流）とのかかわりを述べた。第一節では、谷崎と上方舞との出会いを跡づけ、『細雪』のいくつかの挿話にその体験が反映していることを検証した。第二節では、谷崎の上方舞への洞察を、随筆などから読み取った。第三節では、『細雪』の妙子の人物造形を、彼女が上方舞を学び、「雪」を踊ってみせるという点に注目して考察した。

第五章は、戦後に京舞（井上流）と出会った谷崎の晩年に至る芸能への洞察を述べた。第一節では、随筆『雪』をとりあげ、同題の地歌、及び「小簾の戸」の詞章の分析をふまえて、なお「永遠女性の面影」を求めてやまない谷崎の想いを読み取った。第二節では、上方舞と訣別し、京舞と交流を持つに至った谷崎の歩みを跡づけた。第三節では、最晩年の谷崎の「永遠女性の面影」への想いが、京舞、義理の娘渡辺千萬子への想いなどを通じて、日本人の死生観の一典型をあらわすともいえる、地歌「残月」に投影されていたことを述べた。

終章では、本論文の考察のまとめと、谷崎作品における地歌、上方舞、京舞の重要性を、あらためて述べた。

博士学位請求論文の目次は以下のとおりである。

序章

第一章 古典主義作品のモチーフ「地歌・上方舞」に至るまでのプロセス

- 一、戯曲『象』における「保名狂乱」と「狐會」——谷崎文学のテーマ「狐」「母恋い」「白」「姉妹対象恋愛」の端緒と江戸趣味音楽——
- 二、「蘆屋道満大内鑑」における谷崎の恋愛傾向の原型——「姉、妹」との恋愛と狐に対する恐れと異類婚——

第二章 谷崎の「江戸つ児」意識と江戸趣味——芸能の視点から——

- 一、谷崎作品に影響を与えた下町庶民の愛好音曲
- 二、谷崎の生活行動に見られる「江戸つ児」
- 三、江戸趣味に隠された願望を紐解く——『幫間』『女人神聖』『少年の脅迫』から——
- 四、地歌・京舞への端緒——『朱雀日記』より——

第三章 地歌曲目の視点から谷崎の作品を読み解く

- 一、谷崎の地歌への開眼
- 二、谷崎が愛した地歌
- 三、「綾衣」「由縁の月」——詞章から読み解く『蓼食ふ虫』の登場人物、老人とお久の心情とその背景——
- 四、「黒髪」——生身の女の情念の歌、『蓼食ふ虫』の美佐子の心情および晩年に至るまでの谷崎の「黒髪」に対する思い、主人公要の知る地歌「黒髪」と「雪」、その裏に隠された妻美佐子とそのモデル千代夫人の情念——
- 五、松子御寮人と「黒髪」
- 六、「菊の露」——丁未子夫人との結婚生活の破鏡と根津松子への恋慕の曲——
- 七、『卍』——谷崎の地歌熱中時代における地歌引用皆無の作品——
- 八、「茶音頭」の詞章と『春琴抄』および回想録『初音』——谷崎自身と佐助、松子と春琴の役割、自己投影と松子御寮人から妻への二人の関係性の変化——
- 九、地歌「茶音頭」に隠された人間関係——『春琴抄』の春琴、佐助から『初音』の「爺」「婆」——

第四章 『細雪』

- 一、戦前の谷崎文学の集大成の作品『細雪』の中での地歌・上方舞の重要性
- 二、谷崎と上方舞「山村流」との関わり
- 三、妙子と地歌「雪」

第五章 『細雪』その後

- 一、随筆『雪』
- 二、山村流との訣別
- 三、井上流との出会いと谷崎の老後と「残月」

終章

参考文献リスト

付録

論文審査の結果の要旨

学位論文審査委員会は、当該論文の発表会を2018年2月16日に公開で開催し、申請者による発表をふまえ、質疑をおこなって内容を審査した。

本論文における特徴的な研究上の方法、結論づけられた新たな知見、見解、また研究現況に寄与する面をあげる。

1. 谷崎潤一郎の作品すべてについて、日本古典芸能への言及、詞章の引用などを精査し、付録の一覧表にまとめた。地歌（上方舞、京舞）については、とくに第三章・第二節で抜粋し、説明を加えて表示した。これまでにこうしたデータベースは存在せず、その研究史上の価値はきわめて高い。
2. 1を根拠として、谷崎の主要な作品について、日本古典芸能（第一、二章では歌舞伎、江戸端唄など、第三、四章では地歌、上方舞など、第五章では京舞など）を論拠として解釈をおこなった。
3. 2において、従来の研究史にはみられなかった解釈を多く示しえた。たとえば、第一章・第二節における「蘆屋道満大内鑑」の重要性の指摘、第二章・第二、三節における江戸趣味の内実の指摘、第三章における地歌の体験及び詞章の諸作への反映の指摘、第四章における地歌の詞章及び上方舞体験の『細雪』への反映の指摘、第五章・第一節における地歌の詞章の『雪』への反映の指摘など。第一、二章における新釈は、先行研究が示した観点を深化させたものといえるが、第三、四、五章における新釈は、そもそも地歌に論拠を置くという観点自体から、筆者の創出による。いずれにせよ研究史上の価値はきわめて高い。なお、これらの成果の一部は、二つの学会発表で既に公表され、高い評価を得ていることを付言する。

つぎに、本論文における不十分な面をあげる。

1. 研究史とのかかわりがよく述べられているとはいいがたい。すなわち、日本古典芸能を論拠としない従来の解釈と、それを論拠としたこのたびの解釈とを対照し、その相違を述べるという作業が、すべての作品について尽くされているとはみなしがたい。
2. 書記及び記述の水準において、推敲不足の箇所が散見された。

このように本論文には、いくつかの問題点があることも事実である。しかし、それらは本論文の内容を今後公開、発展させてゆく過程において、じゅうぶんに修正可能であると判断された。本論文は、そうした問題点を措いても、貴重な調査成果と新たな解釈とを示しえており、当該研究領域に一定水準以上の成果をもたらした、また今後も発展が期待できる業績だと認定される。

以上より本委員会は、本論文が学位論文の要件を満たしており、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいと判定した。